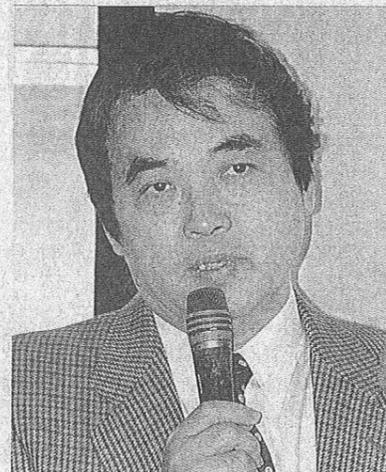


さんが講演。第2部の討論会では、AMDA兵庫県支部の小倉健一郎医師と桂木聡子薬剤師、毛利多恵子助産師、中田由紀さんの4人が、子ども病院への思いや支援方法などを話し合った。シンポの詳細を報告する。【藤原崇志】

とこれからの取り組み」がこのほど、神戸市中央区で開かれた。第1部では、AMDAグループの菅波茂代表やAMDA兵庫県支部長の江口貴博医師、AMDA社会開発機構の鈴木俊介理事長、毎日新聞大阪本社前編集局長の藤原健

AMDAネパール子ども病院開院10周年シンポジウム詳報

医科大学つくり人材育成を



AMDAグループ代表 菅波 茂

子ども病院は、毎日緊急援助隊、医療チームの副団長として、AMDA兵庫支部の小倉健一郎医師が活躍。Aは84年に日本初の多国籍NGOとして発足。世界30カ国に支部があり、国連に政策提言することでもできる。中国・四川大地震では、日本政府の国際

2万人目の赤ちゃんが誕生



AMDA兵庫県支部長 江口 貴博

病院開設のきっかけは、93年に研修で来日したAMDAネパール支部長のラメシユワール・ポカレル医師が、日本の小児医療を見て、ネパールにも子ども病院を造り、高度医療を受けさせたいという夢を持ったのが始まりだった。当時、

乳幼児死亡率、90年比で半減



AMDA社会開発機構理事長 鈴木 俊介

ネパールでは90年代に民主化が始まった。しかし、汚職などで政党機能がせず、不満を持ったグループが96年にネパール共産党毛沢東主義派(マオ派)を結成し、武力行使を開始。02、06年にかけて、反民主化で強権政治を行う国王とマオ派な

討論会要旨

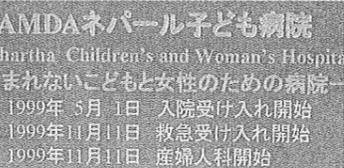
小倉健一郎医師
10年間子ども病院の医療支援に携わった。最初に「見てはいけないものを見てしまった」と現地でも悲しい状況を知ると、徹底的にかかわってまいりたくなるから。現地では手術中の停電も当たり前。日本では決して死ぬことのない病気で、多くの子どもたちが亡くなっている。ネパールは日本より命の重みが軽んじられている。だからこそ、医師としての原点はネパールに感じるし、や

桂木聡子薬剤師

子ども病院を毎年訪問し、薬の管理方法や薬局の役割などについて指導している。まず現地に薬剤師の資格や

りがいもある。現地では、環境の整った首都カトマンズを離れる医師が少なく、地方の医療レベルが上がらない。子ども病院はネパールで唯一の小児と出産の両方を備えた病院。周産期病棟増設などで、医療機能を高めること、医師や患者を集め、スタッフが誇りを育てる病院にしたい。

子ども病院を毎年訪問し、薬の管理方法や薬局の役割などについて指導している。まず現地に薬剤師の資格や



AMDAネパール子ども病院
Siddhartha Children's and Woman's Hospital
一慮まれない子どもと女性のための病院
1999年 5月 1日 入院受け入れ開始
1999年 11月 11日 救急受け入れ開始
1999年 11月 11日 産婦人科開始



AMDAネパール子ども病院の開院10周年を記念して開かれたシンポジウム

毛利多恵子助産師

ネパールを訪問し、助産師や看護師などについてワークシ

を教えた。妊産婦死亡率が高いままなのは、迷信などに基いた古い考え方のしゅうとめが出産や育児を管理するため、若い女性に、妊婦健診や安全なお産方法が普及していないのが大きな要因。嫁は病院にも行かせてもらえず、不衛生な自宅でお産を余儀なくされ、妊娠中毒など危険な状態を早期発見できないまま出産し、大量出血で死亡する場合も多い。病院へ行くにも山道を長時間も男性が背

率も約60倍。子どもの命が簡単に失われていた。子ども病院ができて、医療環境は改善しており、外来患者は延べ40万人、入院患者も延べ4万人になり、先月には2万人目の赤ちゃんも誕生した。被災者からの支援で、震災犠牲者(6434人の3倍以上)の子どもが、遠く離れたネパールで生まれている。

中田由紀医療事務員

税理士や酒屋店主、卸売市場職員などが集まり、子ども病院を支援するために00年に設立した有会社「奇兵隊」(明石市)のメンバーとしてネパールを訪問した。病院の運営資金集めのため、チャリティイベントでの出店など多彩な行事を展開

子ども病院では、ベッド不足や医療環境を改善するため、周産期病棟を増設予定でAMDA本部(岡山市)は寄付を募っている。問い合わせは同本部(0866-284-7730)。

人に優しくすることが大きな力に



ビデオを通して講演する藤原健・毎日新聞大阪本社前編集局長

子ども病院建設のためのキャンペーン報道を始めると、被災者から約5000万円もの義援金が寄せられた。「あの時、助けてくれたのだから、ネパールなどアジアの人が困っているのなら、助け返そう」というメッセージがあった。70年代後半に、ベトナム戦争で発生した大量の難民を救おうと日本のNGOが活動を始めた。阪神大震災では「ボランティア元年」の言葉が生まれたように、私たちは人に優しくすることが大きな力になることを学んだ。その象徴が子ども病院だと思ふ。病院には被災者の心がこもっている。「困った時はお互い様」という考え方が、今後も継承されてほしい。子ども病院がある限り、その大切さを伝えたい。